

斷有之間敷候事。

一、頭々年頭々々、与中禮に可參候。与中病人有之者、名代を遣可申候。一年に一度、与中は与頭方にて振舞可申候。振舞之品定書別紙遣候事。

一、与中之儀、言上可仕儀は封を付會所へ渡置、江戸へ指越可申候。与中斷申事道理相聞不申事は、致吟味言上仕間敷候。与頭吟味仕候通、證明に候其人々書付者、第二に候与頭書付仕、相添越可申候。以上。

寛永十六年

与頭 中

覺

一、年頭与中振舞申定之事。

一汁

三 菜

酒

三献、肴一種不廻は客次第

塗物具不可用。

右之外堅令停止者也。

与頭二人、与中二つに分けて振舞可申候。与頭者双方へ

相加へ可申候。以上。

寛永十六年

与頭 中

### 二五 百姓借米・借銀之儀御定

定

一、分領諸百姓前此跡々借米借銀之事、當納給人知不致皆済已前、一切沙汰仕間敷事。

付、替書出無之内、毎年如此定たるべき事。

一、此跡々未進有之百姓前、給人より借延に致置候分、並跡未進一切仕間敷事。

一、諸給人知當納相滞村々於有之は可申上候。被穿鑿可申付事。

右之通若令違背、爲借物乞使、領内村々へ相越候もの於有之者、曲事所可申付也。

寛永十七年九月廿一日

一通 人持 中  
一通 物頭 中

一通 郡奉行 中

### 二六 家中奉公人給銀拂方之儀御定

覺

一、御家中一年切之若黨小者、草履取年中給銀高之内、春三ヶ二暮三ヶ一可相渡事。

一、三ヶ二之取替分、奉公人召置候日限より廿日切に相渡、暮之分は霜月中可相渡事。

一、右之御定を相背、春取切に召置候者主人越度、其奉公人は急度曲事に可被仰付事。

一、右如御定給銀不相渡滞主人於有之は、其奉公人より主人与頭迄急度可相斷候。其奉公人一ヶ年之給銀、十二ヶ月に令割符、奉公仕日數之外二ヶ月分之給銀を増暇を遣、何方に奉公仕候共右之主人權有之間敷事。

一、若黨之儀は、此跡々春取替少分に取來候者は、其並可爲相對次第事。

一、役人御定之給金にて不置付面々は、給銀指上、公儀より被召置可被下候事。但、与頭手前において、不置付子細遂吟味可申上事。

一、若黨小者、草履取、近年ゆたかに成來候。其分を過候もの曲事に可被仰付候。主人も其心得いたし可召置事。  
(寛永十八年) 九月十日  
御直筆之御裏書。  
此分にも安房・山城の談合可被申候。以上。

民 部 殿

### 二七 家中奉公人給銀之儀御定

定

一、百三拾目 上 かつ若黨

百二拾目 中

百拾目 下

一、百 目 上 小者

九拾五目

九拾目

八拾五目

八拾目

七拾五目